

NUSTEP 修了生に対するアンケート調査

—超短期日本語プログラムの学習効果に関する一考察—

国際教育交流センター 国際プログラム部門

松尾 憲暁・福富 七重¹・加藤 淳
初鹿野 阿れ・椿 由紀子・徳弘 康代²

要旨

昨今、学生の国際間移動 (Global Mobility) の拡大により、1学期に満たない期間で完結する超短期プログラムが増加している。名古屋大学でも、海外協定大学からの要望を受け、2016年から2週間の超短期プログラム NUSTEP を年2回実施している。超短期プログラムの増加に伴い、それに関する論考も増えてはいるが、日本語教育分野での研究は十分とは言えない。そこで著者らは修了生を対象に、情意的な側面に焦点を当てたアンケート調査を実施し、その学習効果の傾向を探った。

調査の結果、多くの学習者にとってプログラムへの参加が学習リソースの見直しや自身の日本語能力の内省に繋がり、プログラム後の日本語学習の動機付けとなっていることがわかった。このような情意的な側面が語学学習に与える影響は大きく、看過できない。今後は、本調査を踏まえたインタビュー調査を実施し、プログラムのどのような事象が学習者に影響を与えているかについてより詳細な分析を行っていきたい。

キーワード

超短期プログラム、追跡調査、アンケート調査、学習効果、動機付け

目次

1. はじめに
2. 先行研究
3. 調査概要
 - 3-1. 実施方法
 - 3-2. アンケートの概要
4. 結果と考察
 - 4-1. 調査対象者の属性
 - 4-2. 学習方法
 - 4-3. 学習リソース
 - 4-4. 日本理解
 - 4-5. 自己の成長に関する項目
5. おわりに

1. はじめに

昨今、グローバル化の流れに伴う学生の国際間移動 (Global Mobility) の拡大により、1学期に満たない期間で完結する超短期プログラム (Short-Term Program)³が増加傾向にある。日本においても、2008年に日本政府が留学生30万人計画を発表したことを皮切りに、大学の国際化の一つの柱としての留学生の受け入れ拡大が叫ばれている。そのような中、従来の交換留学プログラムだけでなく、受け入れ人数の増加が見込める超短期プログラムを実施する大学が増加している。

¹ 南山大学外国人留学生別科語学講師

² プログラムにおける役割は以下の通りである。松尾:プログラム全体のコーディネーター。福富:夏季プログラムの日本語講師。加藤及び椿:春季プログラムの日本語講師。初鹿野及び徳弘:日本語コーディネーター。

³ 本稿では、半年から1年間の短期交換留学プログラム (英語では Exchange Program) と区別するため、1学期に満たない期間で完結するプログラムを「超短期プログラム (Short-Term Program)」と呼ぶ。但し、明確な定義はなく、数週間単位のプログラムでも「短期」と呼ぶ論考も見られ、用語での識別が難しくなっている。

名古屋大学では1996年より半年または1年の短期交換留学プログラム（NUPACE）を実施してきたが、海外協定校より数週間のプログラムの要望の高まりを受け、2016年から2週間の日本語プログラム（NUSTEP：名古屋大学短期日本語プログラム）を年2回（2月と7月）実施している。NUSTEPは名古屋大学の海外協定校に所属している、中級レベル（日本語能力試験N3-N2，ヨーロッパ言語共通参照枠A2-B1相当）の日本語能力を有している学部生を対象としている。プログラムでは、日本語の授業の他、専門講義の受講や学内研究施設の見学、学生との交流等、様々な活動を行うが、日本語の授業と各活動は関連を持つようにデザインし、学習者は午前の日本語の授業で学んだことを午後の講義や活動で深め、翌日の授業で日本語を使って報告する、というサイクルを採っている（資料1参照）。日本語の授業では特に「アカデミックスキルの積み上げ」「午後の活動との連動性」「ピア学習及び日本人学生との交流」に重点を置いている（松尾他2016）。

NUSTEPは2018年3月の時点で、計5回のプログラムを実施し、140名の学習者を受け入れてきた⁴が、プログラムにおいて学習者がどのようなことを学び、それがプログラム後の日本語学習にどのような影響を与えているかについては明らかではない。このような超短期プログラムが学習者に与える効果については、日本人学生の海外留学（送り出し側）の文脈においてはいくつかの研究が見られるものの、日本語教育（受け入れ側）の文脈においては実践報告に留まっており（熊野2008，高橋他2010），今後、質と量ともに研究の拡大が望まれる。

そこで、本稿においては、超短期プログラムの学習効果に関する研究への足がかりとして、NUSTEPを修了した学習者へのアンケート調査の結果を報告し、その学習効果の傾向について探ってきたい。

2. 先行研究

留学の効果に関する研究のうち、超短期プログラム（3ヶ月未満）についてはどのようなものがあるのだろうか。近年、日本人学生を対象にした超短期留学プロ

グラムの効果に関する研究は徐々に増えてきている。その主なテーマは以下の通りである。

- ・短期留学が長期留学を促す効果を持つことを示したもの（加藤・鈴木2017）
- ・プログラムの学習動機への影響を調べたもの（木村・清水2016，茂木2016）
- ・プログラム参加前後の言語能力の変化を調べたもの（久野2011，大津・佐竹2016）
- ・プログラムで派遣された国による意識の変化の違いを調べたもの（アーナンダ他2016）

一方、日本における外国人留学生を対象にした超短期プログラムについては、プログラム設計について（近藤2012）やカリキュラムについて（竹田2013），また各機関における実施報告等はされるようになってきたが（磯野他2016），短期プログラムの効果に関する研究・調査報告は非常に数が少ない。

また、参加者を対象にした帰国後の追跡調査には北山（2012），平井他（2017）等がある。これらではプログラム参加がネットワークにもたらした影響や就職・勉強・人生への影響等について述べられている。しかし、これらは3ヶ月～12ヶ月滞在する短期プログラムについての研究であり、NUSTEPのような3ヶ月未満のプログラムにおける調査研究はほとんど見られない。

3. 調査概要

3-1. 実施方法

本調査は2016年2月から2017年2月までの間に実施した4回のNUSTEPを修了した学習者を対象に、2018年2月に1ヶ月の期間を設け、オンラインアンケートツールであるSurveyMonkey（<https://jp.surveymonkey.com>）を利用して実施した。上述の通り、プログラムはすでに5回実施しているが、5回目に関しては実施直後であるため、本調査の対象からは除外した。

対象となる学習者111名に対してEメール及びSNSを通して回答を呼びかけたところ、69名からの回答が得られた。回収率は62.1%である。

⁴ 第1回（2016年2月）：28名，第2回（2016年7月）：24名，第3回（2017年2月）：30名，第4回（2017年7月）：29名，第5回（2018年2月）：29名

3-2. アンケートの概要

アンケート項目は、先行研究を参考にいくつかの質問項目を挙げたのち、パイロット調査として前述の対象者の中から1名に対して事前にインタビューを実施し、プログラムに参加して考えたことについて話してもらった結果や、執筆者のプログラム修了後の学生とのやりとりの中から得られた知見に基づき質問項目の選定を行った。なお今回は、プログラムへの参加による学習効果のうち、学習内容（日本語の習得）ではなく情意的な側面に焦点を当てた。

質問は「調査対象者の属性」「学習方法」「学習リソース」「日本理解」「自己の成長に関する項目」という5つを上位項目とし、それに関連する23の質問を下位項目として設けている(資料2参照)。質問は選択式及び自由記述形式から構成されている。各質問には日本語の他、英語と中国語を用意していたが、全ての回答は日本語または英語で得られた。

4. 結果と考察

4-1. 調査対象者の属性

アンケート回答者69（女性42，男性27）の派遣元大学の所在地は、中国（34）、台湾（14）、香港（8）、タイ（4）、オーストラリア（4）、インドネシア（2）、韓国（2）、ベトナム（1）であった。母語別に見ると、中国語が多く、49、次いで広東語8、タイ語4、英語2、インドネシア語2、韓国語、ベトナム語各1、中国語と英語、中国語と広東語のバイリンガルが各1で、バイリンガルを含め、中国語と広東語の母語話者で全体

の85.5%を占めている。

回答者のNUSTEPへの参加時期は、2016年2月、2016年7月が12ずつ、2017年2月が20、2017年7月が25である。参加時の学年は、1年生2、2年生23、3年生29、4年生15で、入学年度と卒業年度に比べて2年生、3年生での参加が多いことがわかった。

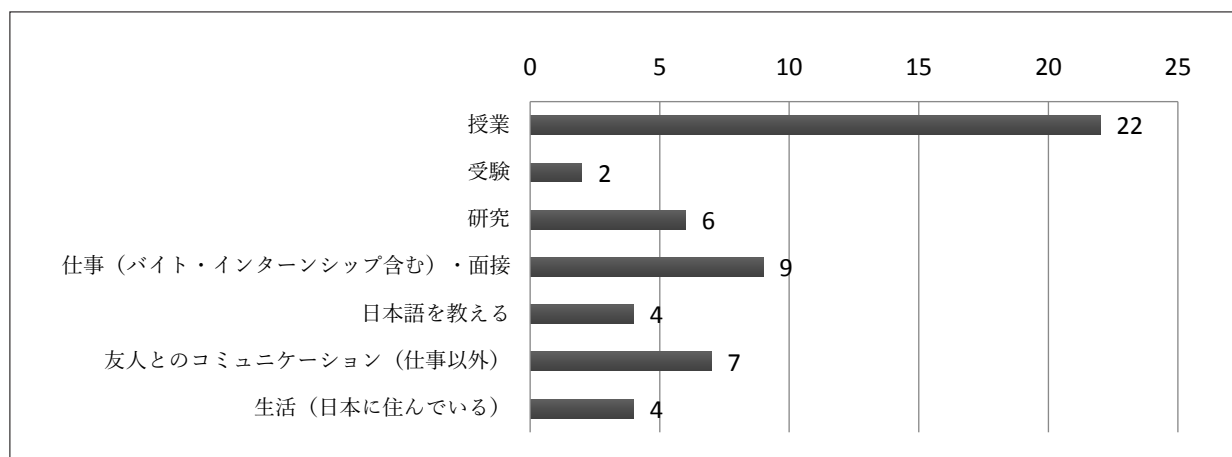
参加時の日本語学習歴は、以下の表1の通りである。参加時の学年の調査結果から考えると、大学に入ってから日本語学習を始めて、本プログラムに参加する学生が多いと思われる。

表1 NUSTEP参加時の日本語学習歴

学習期間	人数	%
1年未満	5	7.25
1年～2年未満（含1年ぐらい）	15	21.74
2年～3年未満（含2年ぐらい）	20	28.99
3年～4年未満（含3年ぐらい）	17	24.64
4年～5年未満（含4年ぐらい）	7	10.14
5年以上	5	7.25
合計	69	100.00

プログラム後の経歴については、記述内容に統一性がなくまとめることはできないが、大学院を含め学業を継続しているという回答が多かった(42)。卒業した／就職する予定だ／就職したと回答した者は全部で9であった。他大学（日本以外も含め）の短期プログラムへの参加、日本語能力試験合格や日本関連のアルバイト等の記述もあった。

プログラム後、再度日本に来たかという問いに対しては、「来た」が25、「来ていない」が44であった。「来た」という回答のうち、約3分の1が複数回来日して



グラフ1 帰国後の日本語使用場面

いる。来日期間は1, 2週間が最も多かった。来日の目的は旅行が一番多く(18), 次に交換留学(5), 大学院進学(3)であった。

「今、仕事や勉強で日本語を使用するか」という問いに対し、「はい」が42, 「いいえ」は27であった。「はい」の回答のうち、よく使う人が半数程度、時々使うが3割程度となっている。どこで使うかについては、以下のグラフ1の通りである(複数回答あり)。約半数は日本語の授業に関係した場面で使用しているが、そのうちの半数は授業だけでなく、友達とのコミュニケーションやアルバイトでも使っていると回答している。帰国後に、授業以外でも日本語を使う機会を持っていると答えた学生が一定数いることは興味深い。その詳細については、今後インタビュー等のフォローアップで検証を試みたい。

4-2. 学習方法

学習方法に関わる問いは、「日本語の勉強についてプログラム中に考えたこと・気づき」及び「そのことで日本語の勉強法をどう変えたのか」、「現在でも日本語の勉強を続けているか」「現在の日本語学習に対する興味はプログラム参加時と比較してどうか」の3つである。

はじめに、日本語の勉強についてプログラム中に考えたことや気づきについて、回答の中から共通する要素を取り出し整理する。なお、有効回答は43であるが、複数の要素を含む回答が大半であるため要素の合計は回答数によらない。大別すると、日本語力の不足や自信等の自己の日本語力への気づき、学習方法・学習環

境に関する気づき、個別の技能に関する気づき、就職や日本語学習の継続等将来の方向性に関わる気づき、である(表2)。

プログラムでの日本人学生等との交流によって話すことの重要性に気づいたという記述が多く見られ、目標言語の環境での学びを意識したことが窺える。また、「プログラムの中での会話がだいたい分かったので、かなり自信をつけた」「日本語の言葉や表現で分からないものがまだたくさんある」といった回答もあり、日本人との交流が自己の日本語力への気づきに繋がったことが読み取れる。この経験を生かして勉強を続けたい、日系企業で働きたい等、将来のキャリアにつながる回答もあった。

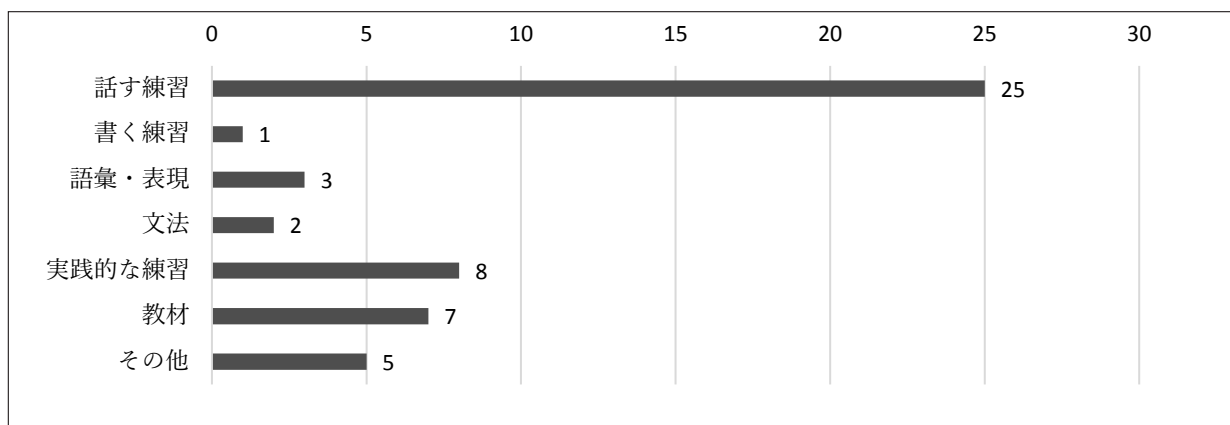
次に、そのことで日本語の勉強法をどう変えたのかという問いの回答を見てみると(グラフ2), 話す練習に力を入れているという回答が25で総数51の半数を占める。教科書を使うだけでなく実践的な練習を取り入れているという回答が8, 日本語の新聞を読む, 字幕なしで日本のアニメーションを見る等の教材を変えた例が7と続く。

先に挙げたプログラム中の気づきには、話すことの重要性や学習方法や学習環境についての回答が多かったことからみても、プログラムでの気づきが帰国後の学習方法の変化に影響を及ぼしたということは明らかである。

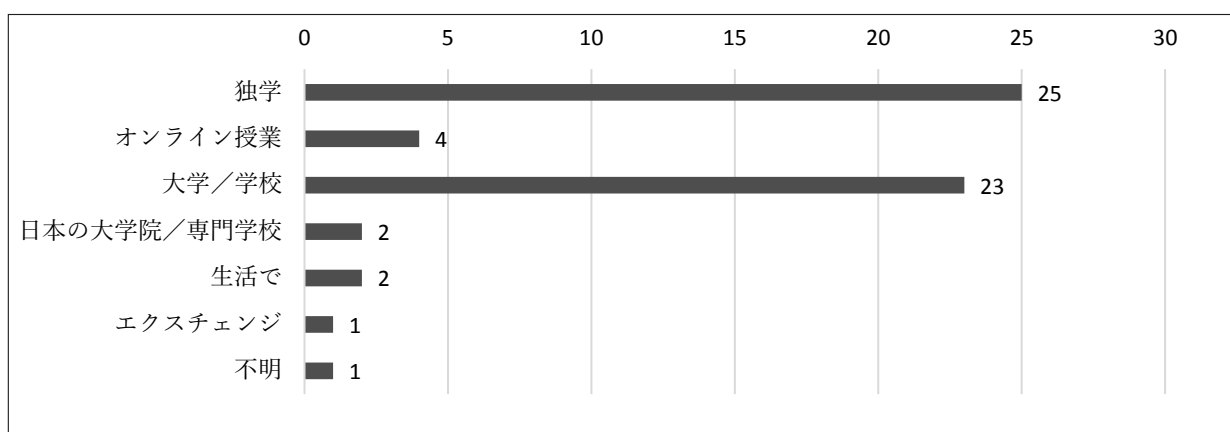
では、帰国後も日本語の勉強は続けているのだろうか。この問いへの回答は、66のうち58(約88%)が「はい」である。期間については、プログラム参加年が異なるため有用な回答が得られなかったが、「どこで」

表2 日本語の勉強についてプログラム中に考えたこと・気づき

自己の日本語力への気づき	8	日本語力の不足を感じた	6
		自信をつけた	2
学習方法・学習環境	18	自国の日本語学習との違い	3
		学習言語の環境での学び	3
		日本語母語話者との交流	12
個別の日本語技能	28	会話力・日常会話	14
		ディスカッション	2
		発表	4
		語彙	3
		文化等の知識	3
		コミュニケーション	3
将来の方向性	2	将来の進路やキャリア	1
		日本語学習への意欲	1



グラフ2 プログラム参加以前と帰国後の日本語の学習方法の変化



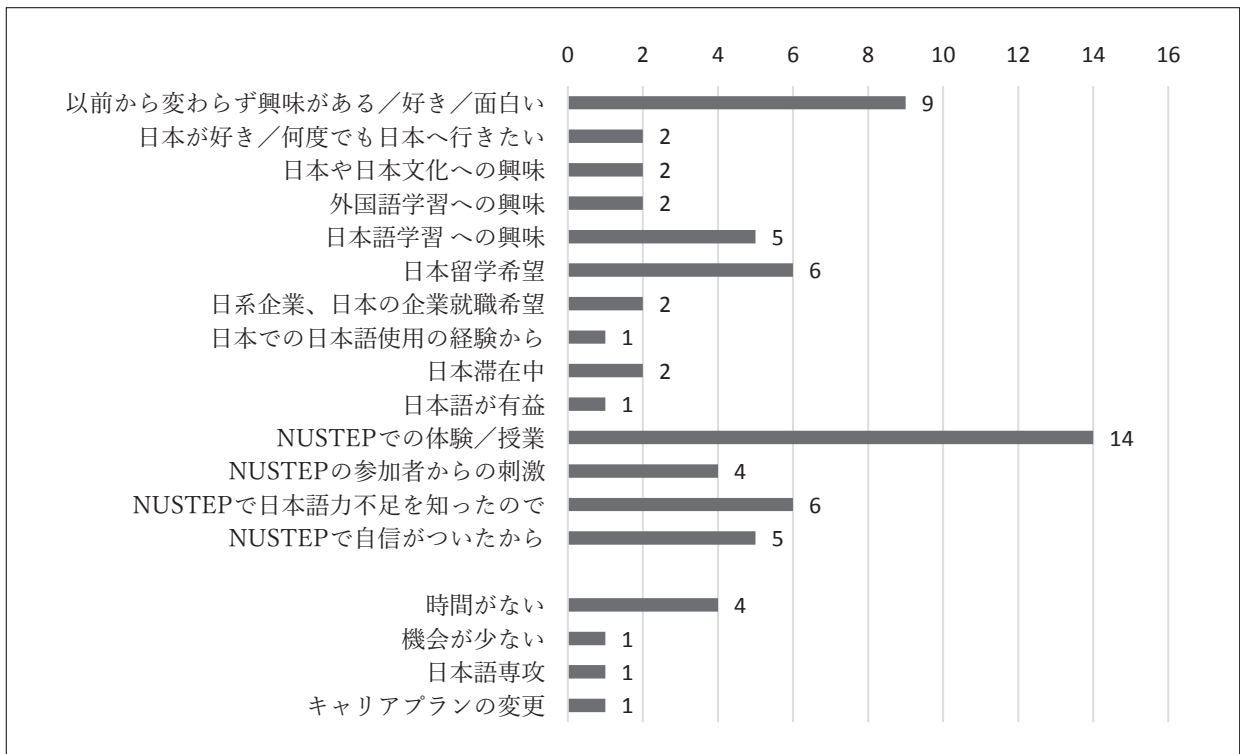
グラフ3 帰国後、どこで日本語の勉強を続けているか

という問いには半数の25が独学、23が大学や学校と回答している(グラフ3)。オンライン授業という回答が4、日本の大学院や専門学校が2、と続く。さらにランゲージエクスチェンジや生活でという回答もあり、日本語の学習において話す練習や実践的な練習に力を入れていることが裏付けられる。

最後に、現在の日本語学習に対する興味がプログラム参加時と比べてどう変化したのかを見てみよう。まず、日本語学習に対する興味はプログラムに参加した時より今の方が「強い」37.9% (25) と「少し強い」36.4% (24) が全体の3分の2を占め、「変わらない」が22.7% (15)、「少し弱い」と回答したのは2である。その理由を整理したグラフを次に示す(グラフ4)。

これを見ると、「以前から変わらず好き」「日本が好き/何度でも日本へ行きたい」「日本や日本文化への興味」の合計が約19%、日本留学や日系企業への就職を希望するといった回答が約12%なのに対して、「NUSTEPでの体験/授業」「NUSTEPの参加者

からの刺激」「NUSTEPで日本力不足を知ったので」「NUSTEPで自信がついたから」といったプログラムでの経験を日本語学習への興味の変化の理由とした回答が合計で約43%にのぼっている。ただし、この回答の内容を詳しく見ていくと、プログラムでの体験や参加者との出会いという外的な刺激によるものが6割を占める一方で、「日本語力の不足を知った」「自信がついた」という自己の日本語力に対する自己評価が動機付けとなることが窺える。さらに、不足を感じることも自信を持つことも学習動機となりうることが顕著にあらわれている。プログラムでのどのような体験が帰国後の日本語学習継続を動機付けたのかという点についても検証が必要であるが、「日本語力の不足を感じた/自信を持った」という回答の具体的な事例を検証することは日本語の授業だけでなく、プログラム全体における日本語を使用する場面とそのあり方を振り返り、どのような場面でのどのような言語使用の体験が学習を促すのかを考察するためにも重要であろう。



グラフ4 プログラム参加以前と帰国後の日本語学習への興味の変化の理由

表3 プログラムに参加した学生との連絡手段・使用言語・話題・頻度

連絡手段	SNS 52(WeChat 33, Facebook 14, LINE 14, Instagram 7, Messenger 2, what'sapp 3, QQ 1) 対面 8, インターネット 1, 手紙 1
使用言語	日本語 19, 中国語 19, 英語 6, 広東語 3
話題	生活について(近況) 19, 勉強(専門, 日本語) 6 SNS(写真)へのいいね・コメント 5 雑談(色々) 5, 進路 4, 留学 2, 就職 2 挨拶 2, 進学 1, ドラマ 1, ゲーム 1, 旅行 1
頻度	時々, 毎日 ※記述方法が多岐にわたるため, 数は示さない。

4-3. 学習リソース

プログラムに参加した学生と連絡を継続しているかという問いに対して、有効回答数66のうち、「はい」が約81.8% (54), 「いいえ」が約18.2% (12)であった。このことからほとんどの学習者がプログラム修了後もプログラムで形成したネットワークを維持し続けることがわかる。

では、そのようなネットワークは具体的にどのような形で継続しているのだろうか。連絡手段、頻度、使用言語、話題について聞いた設問への回答(複数回答有)をまとめると以下ようになる(表3)。

連絡手段についてはSNSを利用している学習者が圧倒的に多い。中でも、WeChatの使用が目立っているが、これは、4-1で挙げた通り、プログラム参加者の多くがFacebookやLINEが見られない中国からの学習者であり、プログラムの全体共有のためのグループにWeChatを使用していたことに起因しているものと見られる。使用言語については、日本語と中国語が同数である。プログラム後のやり取りとして、運用力の高い媒介語が使われがちであることは想像に固くないが、日本語を継続して使っている学習者も多いことは、プログラムでの交流が後の人的学習リソースの一つとして機能していることを意味している。話題につ

いては生活に関することが多いが、勉強や進路の相談をしている学習者もある。このようなやりとりを毎日行っている学習者もごくわずかながらいたが、多くの学習者は数カ月に1回のやりとりに留まっていた。

一方、プログラム中に会った人との連絡を継続しているかという問いに対しては、有効回答数66のうち、「はい」が約31.8% (21), 「いいえ」が約68.2% (45) であり、プログラムに参加した学生との連絡と比較し、継続している割合がかなり下がる。

また、連絡手段、頻度、使用言語、話題について聞いた設問への回答（複数回答有）は以下の通りである（表4）。

連絡を継続している学習者のやりとりの相手は名古屋大学の教員、学生・TA、ホストファミリーがほと

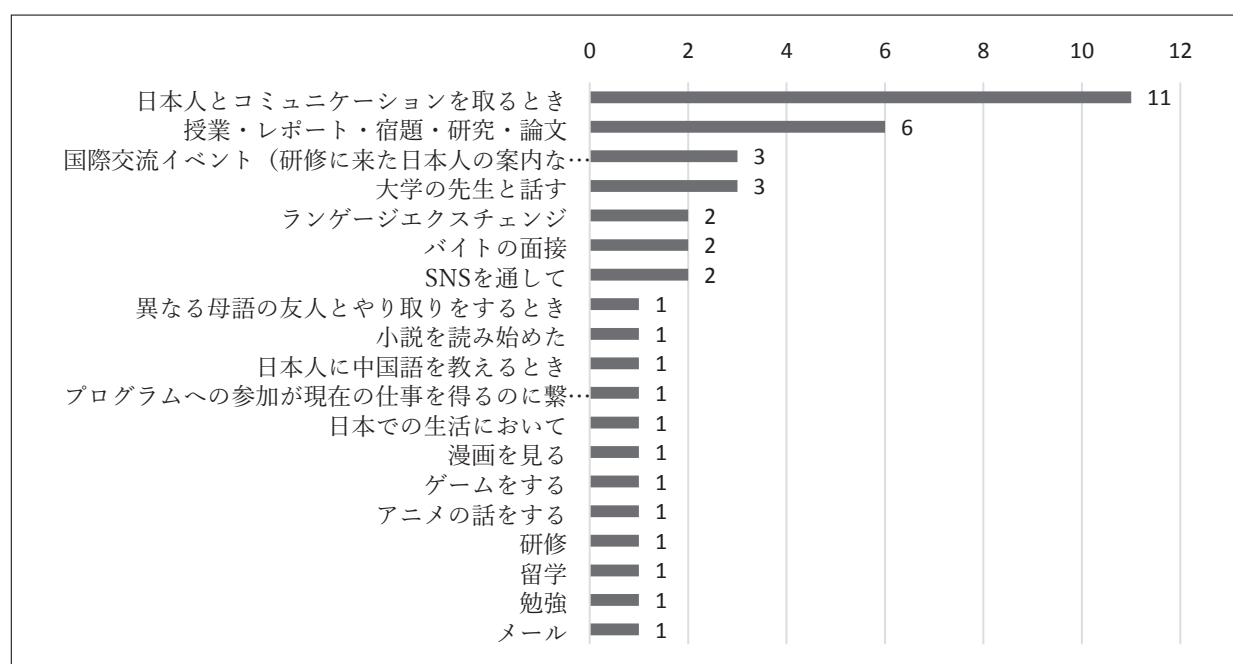
んどであった。相手が日本人であるためか、連絡手段はFacebook、使用言語は日本語の割合がそれぞれ高くなっている。話題については参加学生と同様に生活（近況）の割合が高いが、学生やTAとは日常的な生活に関する連絡が多く、教員に対しては近況報告に近い連絡が多いものと考えられる。頻度はそれほど多くはないようである。

では、プログラム前後で日本語を使う機会は増えたのだろうか。有効回答数66に対して、「とても増えた」約18.2% (12), 「まあまあ増えた」約33.3% (22), 「変わらない」約42.4% (28), 「少し減った」約4.6% (3), 「とても減った」約1.5% (1) という結果となっており、半数程度の学生がプログラム参加前より日本語を使う機会が増えたと回答している。

そのような学生が具体的にどのような場面で日本語

表4 プログラム中に会った人との連絡手段・使用言語・話題・頻度

対象	名古屋大学の教員 7, 名古屋大学の学生・TA 6 ホストファミリー 5, 寮のルームメイト 1
連絡手段	SNS 11 (facebook 7, LINE 4, Wechat 3, 不明 2) メール 2, インターネット 1, 手紙 1, 訪問 1
使用言語	日本語 13, 英語 2, 中国語 1
話題	生活（近況）6, 研究生の試験について 1 進路 1, 日本の面白いこと 1, 論文 1 学校のこと 1, 観光 1, 仕事のこと 1, 食事の約束をする 1 新年の挨拶 1, 雑談（色々）1
頻度	時々, 毎月 ※記述方法が多岐にわたるため、数は示さない。



グラフ5 どのような場面で日本語を使うようになったか

を使うようになったかが次のグラフ5である。

プログラムに参加したことによって、話すことに自信を持った学習者が少なくなく、帰国後、留学生のような自国にいる周囲の日本人とのコミュニケーションの機会が増えたという回答が多かったことは興味深い。この中には、自分たちから積極的に話しかけているという回答もあり、自身の周囲の学習リソースを見直し、できる限り日本語を使う機会を増やそうという姿勢が窺える。その他、日本語のクラスでも積極的に日本語を使おうとしている等の行動も見受けられた。

4-4. 日本理解

プログラムについて新しくわかったことがあるかという質問に対して、回答数64のうち、「はい」が約92.2% (59)、「いいえ」が約7.8% (5) であり、ほとんどの学習者が何らかの気づきを得ている。そのような気づきは多岐にわたるため、全てを紹介することは紙面の関係上難しいが、分類すると「日本人」「社会・文化」「生活」「大学」「学習」に対する気づきに分けることができる。以下、それぞれ回答が多かったものを記述する。

日本人	: 人が優しくなった
社会・文化	: 日本や名古屋のことを深く学べた
生活	: 日本での生活が理解できた, ゴミの分け方がわかった, 美しい
大学	: 日本の大学の雰囲気かわかった, 大学生の日常が理解できた
学習	: 言葉の使い方がわかった, 敬語をよく使っている

中でも「日本人」「社会・文化」「生活」についての記述が多かった。以前持っていたイメージとの違いを感じた学習者も少なくなく、「生活をする」という行為を通して、多くの学びが得られたようである。短期間

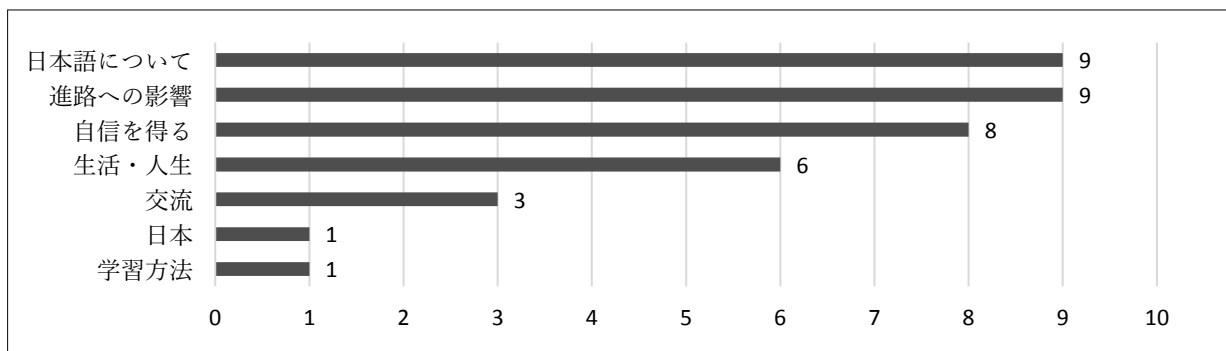
とはいえ留学生として生活したことにより、単なる旅行では得られない経験となっていることは、学習者の将来のキャリア形成に少なからず影響を与えているものと推察される。

4-5. 自己の成長に関する項目

プログラムに参加する前と後で、自分の行動や考え方に変化があったかという問いに対して、有効回答数44のうち、「変化があった」が84.1% (37)、「変化がなかった」は15.9% (7) であった。具体的にどのような変化があったかについては、以下のような結果を得た(グラフ6)。

様々な影響についての回答が見られたが、特に「日本語」「進路への影響」「自信を得る」に関する変化が多かった。「日本語」については、日本語学習への動機が高まった (4)、自分の日本語に自信を持った (2)、日本語でよく話すようになった (1) といった回答が見られた。「進路への影響」では、日本へ留学したいと思うようになった (6) が最も多く、また日本で生活・仕事をしたい (2) もあり、日本への留学や仕事を考えるようになったことがわかる。「自信を得る」では勇気を持つようになった (3)、外国人と話す時に自信が持てるようになった (1)、人生に前向きになった (1) 等の回答が見られた。「生活・人生」に関しては、異文化への寛容な心を養った (2)、視野を広げることの重要性を学び、探求心が増した (1)、ゴミを分別するようになったという生活習慣の変化 (1) 等の回答があった。

次に、そのような変化が起きたのはどうしてかという問いに対して、有効回答数38の中で多かったものを述べる(表5)。「人からの影響」「日本での生活」というのが最も多い。留学した時に出会った人や海外での生活そのものから影響を受けていることが分かる。また、「自分の日本語力を知ったから」「視野が広がった



グラフ6 プログラムに参加する前と後の自分の行動や考え方の変化

表5 自分の行動や考え方の変化の理由

①人からの影響（8）
・日本で名大生や日本人にお世話になったから…2 ・先生やT Aさんと話している中で、先生のまじめさ…2 ・優秀なクラスメートと一緒に刺激を受けた…2 ・日本は人が優しい、他の人の考えが分かった…2
②日本での生活（8）
・名古屋の環境、名大の雰囲気はいいから…2 ・日本の生活はいい、日本・日本文化が好き、日本は綺麗・魅力的…5 ・毎日日本語を話すのが好き
③自分の日本語力を知ったから（5）
・自身の話す力がよくないと思ったから…2 ・自分の日本語力を確認できた ・ことば自体がコミュニケーションの障害にならないと分かったから ・自分の日本語が通じて、日本人と話すことが好きになったから
④視野が広がったから（4）
・日本語を学ぶこと／留学は将来性がある…2 ・異文化の人と関わることで、オープンになり違いを認めるようになるから ・プログラムの後、更に他の国のプログラムに参加した
⑤初めて外国に行ったから（3）
・初めて親と離れて／外国のプログラムに参加した…3

から」「初めて外国に行ったから」等の回答も得られたのは興味深い。留学経験から客観的に自身や物事を見つめ直したことが影響を与えていることがわかる。

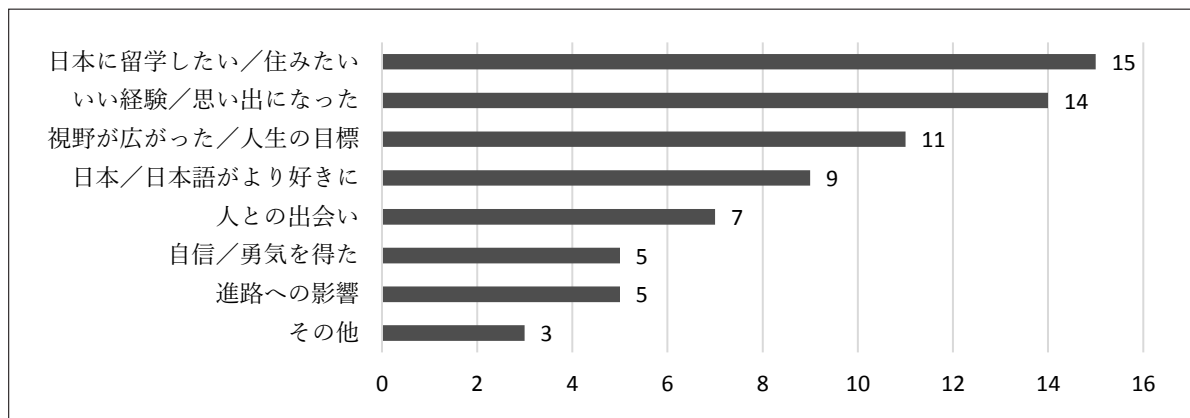
プログラムに参加したことが、人生にどんな影響を与えたかという問いに対して、有効回答数62の結果は次の通りである（グラフ7）。

「日本に留学したい／住みたい」という回答が特に多く、また人生における「いい経験／思い出になった」「視野が広がった／人生の目標」という回答も同様に多かった。「視野が広がった／人生の目標」では、色々な国に興味を持った／理解した（2）、自分／人生の目標がわかった（2）という回答があった。関連して、大学院進学を決めた／考える（3）等の「進路への影響」も見られる。また、「日本／日本語がより好きになった」

や、色々な／貴重な人に出会った（3）、大切な友達ができ（2）等「人との出会い」に関する影響も少なかつた。プログラム参加が日本に対してよりプラスの印象を与え、その後の具体的な進路等にも結びついていくと考えられる。

先に述べた「プログラム参加後の自身の行動や考え方の変化」と「プログラム参加が人生へ与えた影響」の両方において、多く見られたのが「日本語学習の動機が高まった」「日本留学等進学への影響」等である。また「自分に対する自信」「異文化に対する理解」「視野の広がり」等の影響も多く、2週間の超短期プログラムでも自己の成長を色々な側面を感じていることが窺える。

プログラムへの参加はその後（仕事や就職等）に何か



グラフ7 プログラムに参加したことの人生への影響

影響を与えたかという問いに対して、有効回答数62のうち、「はい」が66.1% (41)、「いいえ」が33.9% (21)であった。

グラフ8は、「はい」という回答でどのようなことに影響を与えたかをまとめたものである。特に「仕事」に関する影響で、日本で仕事をしたいと思うようになったという回答が多い。実際に日本語で仕事ができたり、プログラムの経験が就活の時に会社から興味を持ってもらえたりした等の回答もある。「日本語力」に関しては、日本語能力試験に合格したり、点数が上がったりしたという回答もあるが、プレゼンがうまくなる／発表の方法を身に付けた(2)等、授業で学んだスキルや発表の経験も挙げられている。また、日本語の勉強法がわかったという回答もあった。その他、日本に留学したい等「留学／進学」に関する影響、日本人の思考が理解できる等「日本理解」に影響を与えたという回答もあった。また、コミュニケーション力を

学んだ／強化した(2)等「コミュニケーション」や、外国人と話すことに自信を持ったという「自信」に関する回答も見られた。

一方、プログラムへの参加がその後(仕事や就職)に影響を与えていないという回答の中には「まだ分からない」や「時間が短い」というものもあり、今後年月の経過とともに影響を感じる可能性も考えられる。

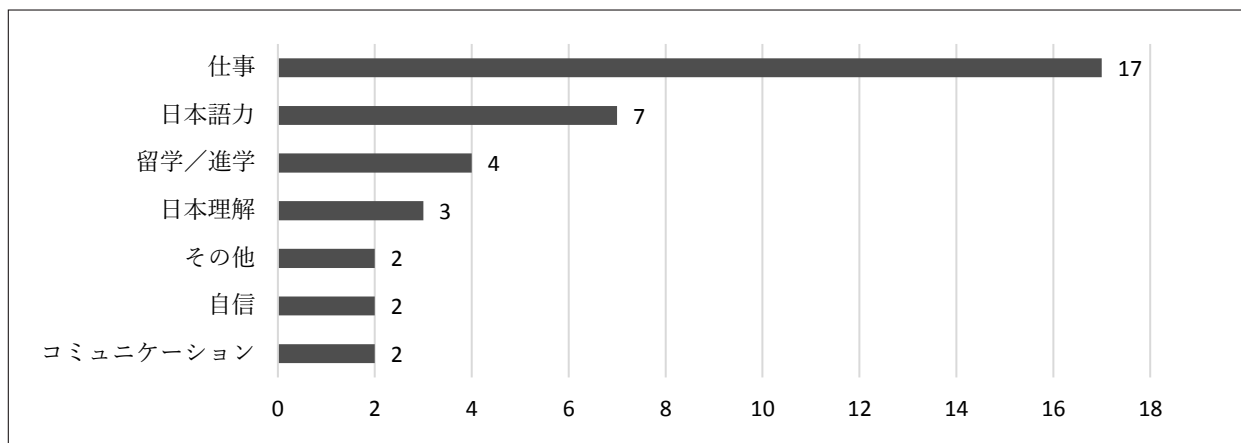
プログラムに参加してから帰国後、母国に対する見方が何か変わったかという問いに対して、有効回答数62のうち、「はい」が50% (31)、「いいえ」が50% (31)であった。短期プログラムでは、帰国後の母国に対する見方にはそれほど多くの影響はないのかもしれない。一方で、見方が変わったとする人は、日本で生活している間に触れた身近なものから影響を受けているようである。「はい」の回答の中で挙げた具体的なトピックは次の通りである(表6)。(「はい」の回答の中には具体的なトピックを挙げていないものも含まれる。)

表6 NUSTEP参加後に変化した母国に対する見方のトピック

	人数
母国全般について	9
環境問題	6
人の気質・話し方	4
交通	3
文化	3
教育	3
物価	2
生活習慣・社会ルール	1

「母国全般について」が最も多く、次が「環境問題」であった。「母国全般について」は、日本を見習うべき(1)、母国はもっと頑張るべき(1)、母国の弱点(1)という日本と比較して自国のマイナス点と指摘する回答がある一方で、母国を誇りに思うべき(1)や、母国をもっと好きになった(2)という回答も見られるのが特徴である。「環境問題」に関しては、中国は発展しているが、環境問題が深刻で日本を見習うべき(1)、台湾は環境問題の課題がある(1)等の回答があった。

また、「交通」「文化」「教育」において、自国の交通問題や文化の発展の不足、教育の質等自国のマイナス



グラフ8 プログラムへの参加がその後(仕事や就職)に与えた影響

面の回答が見られたが、「人の気質・話し方」「交通」「物価」においては、自国の方がいい、便利だという回答も見られた。これらの具体的なトピックのいくつかは授業で扱ったトピックとも関連があり、滞在中に母国と日本の見方に影響を与えた可能性もあると考えられる。

プログラムのことは今もよく覚えているかという問いについて、有効回答数62のうち、「とてもよく覚えている」が58% (36)、「まあまあ覚えている」が40.3% (25)、「あまり覚えていない」が約1.6% (1)、「全然覚えていない」が0%であった。半数以上の学生がとてもよく覚えており、「まあまあ覚えている」と合わせると、回答者のほぼ100%が短い滞在にも関わらず、記憶に残る経験をしたことが窺える。

具体的にどんなことを覚えているか、何が印象に残っているかという問いに対しては、次のような結果となった(グラフ9)。

「午後の活動」「日本語の授業に関すること」が最も多く、次いで「週末のエクスカージョン」「人々」の順に続いた。「午後の活動」は、工場／博物館見学(11)、ラボ見学／色々な見学(4)や有松⁵(3)・着付け教室／書道(4)等である。「週末のエクスカージョン」では、犬山城・名古屋城(7)、ホームステイ・ホームビジット(4)等である。実際に自分が出かけて学んだ経験が強く記憶に残るようである。また着付けや書道等、日本文化の活動を体験したことも印象に残っている。

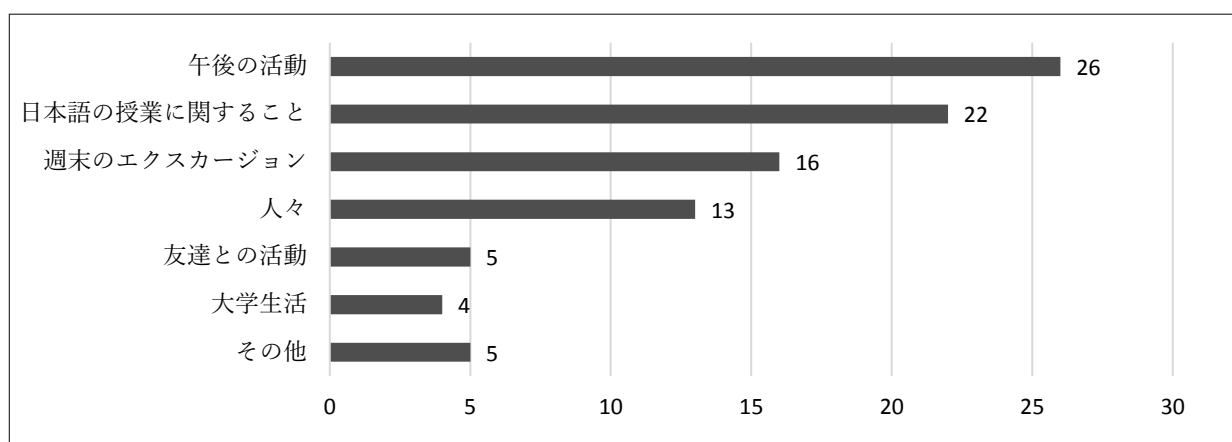
「日本語の授業」は、発表(13)、日本人へのインタビュー(3)、ディスカッション(2)、等である。発表はプログラムの最終目標でもあり、自身が積極的に取り組んだ活動は大変だったことも含めてよく覚えているようである。

「人々」は、先生、TAさん、スタッフ(8)、名大生(2)、異国からの留学生(2)等で、先生やTAさんの優しさ等を挙げた声も多く見られ、人との出会い、関わりも強く印象に残っていることは興味深い。

5. おわりに

以上の通り、NUSTEPを修了した学習者へのアンケートの結果から、2週間のプログラムの学習効果の傾向を探った。多くの学習者にとってプログラムへの参加が学習リソースの見直しや自身の日本語能力の内省に繋がり、プログラム後の日本語学習の動機付けとなっていることは学習のアーティキュレーション(連続性)の面からも非常に重要なことだと考えられる。数週間のプログラムでは語学力は伸びないかもしれないが、情意的な側面が語学学習に与える影響は大きく看過できない。学習者の学習をより長期的な視点で考えていくことが必要であろう。また、このような学習効果はプログラムの内容と切り離して考えることはできず、プログラムデザインと学習効果の関連性についても検討していく必要があるだろう。

本稿はNUSTEPという限定された条件における結



グラフ9 どんなことをよく覚えているか。何が印象に残っているか。

⁵ 有松は旧東海道の池鯉鮒宿と鳴海宿の間の茶屋集落で、絞り染めの産地として栄えた。絞り染めは有松絞りと呼ばれ、現在でも続いている。3回目以降のNUSTEPでは絞り体験及び古い街並みの散策を活動として実施した。

果であり、本結果をもって超短期プログラムへの学習効果を一般化することはできないものの、先行研究の乏しい日本語教育の文脈における超短期プログラムの学習効果について、一つの傾向を示すことはできたものと考えられる。今後は、本調査を踏まえたインタビュー調査を実施することにより、個別具体的な例を収集し、プログラムのどのような事象が学習者に影響を与えているかについてより詳細な分析を行っていききたい。

参考文献

- ・アーナンダ・クマール, 太田絵里, 村田美穂 (2016) 「理工系学生の国際意識に関する超短期海外派遣プログラムの効果 (スリランカと英国の事例から見えるもの)」『グローバル人材育成教育研究』(グローバル人材育成教育学会)第3巻第1号, p.9-18.
- ・磯野英治, 近藤佐知彦, 宮原啓造(2016)「2015年度短期日本語教育プログラムの実施と新たなプログラムの構築」『多文化社会と留学生交流: 大阪大学国際教育交流センター研究論集』20, p.19-24.
- ・大津理香・佐竹正夫 (2016) 「短期海外語学研修はどれほどの効果があるのかー常盤大学の場合ー」ウェブマガジン『留学交流』(独立行政法人日本学生支援機構) 2016年8月号 vol.65
- ・加藤真紀, 鈴木賢(2017)「短期留学の効果:ランダム割当による留学データを用いた実証分析」Working Paper Series / Mori Arinori Center for High Education and Global Mobility (一橋大学森有礼高等教育国際流動化センター): [5] No.WP2017-02.
- ・北山夕華 (2012) 「NUPACE 修了生への追跡調査報告ー交換留学経験と進路選択, ネットワークー」『名古屋大学留学生センター紀要』 v.10, p.181-189.
- ・木村登志子, 清水秀子(2016)「短期留学プログラム参加者における異文化理解と学習動機付けの変容」『嘉悦大学研究論集』59-1, p.75-99.
- ・久野寛之 (2011) 「3週間の短期海外語学研修が大学生の英語能力に及ぼす効果について」『北海道文教大学論集』(12) p.127-145.
- ・熊野七絵(2008)「大学生短期訪日研修における体験交流活動型のコースデザイン」『広島大学留学生センター紀要』18号, p.31-46.
- ・近藤佐知彦 (2012) 「SS プログラム J-ShIP の一年目:新コンセプト超短期日本語プログラムへの挑戦」『多文化社会と留学生交流:大阪大学国際教育交流センター研究論集』16, p.97-106.
- ・高橋志野, 向井留実子, 村上和弘, 菅野真紀子, 築地伸美 (2010) 「超短期日本語・日本文化研修の開発ー愛媛大学「愛アイプログラムにほんごとにはんぶんか」の成果と今後の課題ー」『日本語教育方法研究会誌』17(1), p.24-25.
- ・竹田治美(2013)「日本語短期研修のカリキュラムとその周辺について」『奈良産業大学紀要』29, p.193-198.
- ・平井一樹, 今田恵美, 上田俊介 (2017) 「立命館大学 SKP 修了生の留学生活および日本語学習の振り返りと修了後の状況ー追跡調査の記述分析よりー」『立命館高等教育研究』16, p.83-100.
- ・松尾憲暁, 加藤淳, 椿由紀子, 徳弘康代, 初鹿野阿れ「超短期プログラムにおける日本語学習ー名古屋大学短期日本語プログラム2016年春季の取り組みからー」2016年度日本語教育学会研究集会第2回(中部地区)予稿集, p.45-48.
- ・茂木良治(2016)「短期留学によるフランス語学習態度の変容」『アカデミア. 文学. 語学編』(南山大学) 99, p.67-89.

資料1 全体スケジュール (2017年春季の例)

日程	午前	午後
2/13	入寮	
2/14	開講式, オリエンテーション	クラス分け, 大学紹介, 歓迎会
2/15	エクスカージョン (岡崎)	
2/16	休み	
2/13	日本語: 名古屋と中部地域	日本研究①「伝統と文化」 名古屋大学の学生との交流会
2/14	日本語: 日本の文化 【発表1】	キャリア探求ワークショップ
2/15	日本語: 日本事情 (社会・文化・人)	専門講義・ラボ見学 ①
2/16	日本語: 日本のモノづくり・人作り	日本研究②「企業と労働」
2/17	日本語: インタビューの仕方 【発表2】	日本研究③「現代社会と若者」
2/18, 19	市内視察 (希望者のみ) / 休み	
2/20	日本語: インタビュー報告 【発表3】	専門講義・ラボ見学 ②
2/21	日本語: 最終発表準備	自主学習
2/22	最終発表	修了式, 歓送会
2/23	退寮	

資料2 アンケートの質問項目

	番号	質問項目
1. 調査対象者の属性	1	氏名
	2	性別
	3	派遣元大学の所在地（国、市の名前など）
	4	母語
	5	プログラムに参加したのは何年の何月ですか。
	6	プログラムに参加した時、何年生でしたか。
	7	プログラムに参加した時、日本語をどのくらい勉強していましたか。
	8	プログラムに参加した後の経歴について教えてください。
	9-1	プログラムの後、日本へ行くことができましたか。
	9-2	「はい」の場合、回数や期間を教えてください。
	9-3	また、どのような形で行きましたか？
	10-1	また日本に行きたいと思いますか？
	10-2	「はい」の場合、どのような形で行きたいですか？
	11-1	今、仕事や勉強で日本語を使いますか。
11-2	「はい」の場合、頻度を教えてください。	
11-3	「はい」の場合、どこで使いますか。具体的に教えてください。	
2. 学習方法	1-1	日本語の勉強について、プログラム中に何か気づいたり考えたことはありますか。もしあれば、具体的に教えてください。
	1-2	また、そのことで、日本語の勉強法を変えた場合、どのように変えたか、具体的に教えてください。
	2-1	日本語の勉強は今、続けていますか。
	2-2	「はい」の場合、どこで、どのくらい続けていますか。
	3-1	日本語学習に対する興味はプログラムに参加した時と比べて、今はどうですか。
	3-2	それはどうしてですか。
3. 学習リソース	1-1	プログラムに参加した学生と連絡を取り合っていますか。
	1-2	「はい」の場合、連絡手段、頻度、使用言語、話題について教えてください。
	2-1	プログラム中に会った人（NUSTEPの学生以外）と連絡を取り合っていますか。
	2-2	「はい」の場合、それはどんな人ですか。また、連絡手段、頻度、使用言語、話題について教えてください。
	3-1	プログラムに参加する前と後で、日本語を使う機会は増えましたか。
	3-2	「とても増えた」、「まあまあ増えた」の場合、どんな場面で日本語を使うようになったか、具体的に教えてください。
4. 日本理解	1-1	プログラムに参加して、日本について新しくわかったことはありますか。
	1-2	「はい」の場合、それはどんなことですか。具体的に教えてください。
5. 自己の成長に関する項目	1-1	プログラムに参加する前と後で、自分の行動や考え方に変化がありましたか。もしあれば、具体的に教えてください。
	1-2	それはどうしてですか。
	2	プログラムに参加したことは、あなたの人生にどんな影響を与えましたか。
	3	プログラムへの参加はあなたのその後（仕事や就職など）に何か影響を与えましたか。
	4	プログラムに参加してから帰国後、母語に対する見方が何か変わりましたか。
	5-1	プログラムのことは今もよく覚えていますか。
	5-2	どんなことをよく覚えていますか。何が印象に残っていますか。